

称号及び氏名 博士（言語文化学） 胡 君平

学位授与の日付 平成 29 年 3 月 31 日

論文名 「中国語母語話者による日本語の「させる」構文の習得」

論文審査委員 主査 張 麟声

副査 大平 桂一

副査 山東 功

## 論文要旨

本研究は、中国語母語話者日本語学習者（以下「中国語話者」と称する）による日本語の「させる」構文の習得時の問題点、習得過程及び誤用要因の解明を目的とし、張（2010）で提唱されている三位一体の研究モデル「対照研究・誤用観察・検証調査」に「教材分析」を加えた4つのステップを踏んで検討したものである。

### 研究目的

本研究は主に次の4点を主な研究目的とする。

① 日本語と中国語の典型的使役表現である「させる」構文と“让”構文の意味・用法の分類を行い、両構文に共通する用法と共通しない用法における構文的特徴、異同点及び対応関係を明らかにする。

② 作文コーパスの誤用観察を通して、中国語話者の実際の運用における「させる」構文の用法別の使用実態および誤用傾向を明らかにする。そして日中対照研究で得られた結論と照らし合わせ、推測される誤用の要因を探り、コーパスに出現している用法に関する習得仮説を立てる。

③ 中国語話者を対象に検証調査を行い、調査結果を分析し、用法別の習得仮説の妥当性を検証する。

④ 被験者が使用している日本語教科書の「させる」の扱い方を考察し、扱い方の問題点の指摘及び教材改善の一提案を試みる。

## 研究結果

第2章の対照研究では、日中対訳コーパス、BCCWJ などを利用し、「させる」構文と“让”構文の日中対照研究を行った。具体的には、使役表現の軸である「X（使役者）の事象関与」を分類基準とし、「させる」構文と“让”構文を①指示許容的、②心理誘発的、③他動的、④対象原因的、⑤再帰的、⑥有責的、⑦間接命令的、⑧行為規定的の8つの意味用法に分類した。①～③は両構文の共通用法で、⑤と⑥は「させる」構文に特有の用法で、④、⑦、⑧は“让”構文に特有の用法であることが分かった。さらに、両構文に共通する用法について、次のことが明らかになった。①「指示許容的」用法においては、「させる」構文は“让”構文と違って、待遇恩恵の意味合いを表す場合は成立せず、「てもらう」構文で対応する。②「心理誘発的」用法において、被使役者が1人称である場合、“让”構文は成立が、「させる」構文が不自然となるため、通常自動詞文で対応する。③「他動的」用法において、述語動詞が他動詞または変化過程を持たない自動詞の場合、「させる」構文が成立するのに対し、“让”構文が成立せず、能動文で対応する。また使役者の制御性が低く、述語動詞が自他両用動詞である場合、中国語では使役文と他動詞文の両方を用いることができるのに対し、日本語では使役文しか成立しない。

第3章の誤用観察では、作文コーパス LARP at SCU の分析結果から、中国語話者に見られる「させる」構文の使用実態と誤用傾向、推測される誤用の要因を中心に検討し、次のことを明らかにした。LARP at SCU に出現する用法は3種類のみで、使用率と誤用率の高い順に並べると、「他動的」>「心理誘発的」>「指示許容的」になる。用法別の誤用のパターンを見ると、「他動的」は「させる」の不使用、「心理誘発的」はY（被使役者）を示す助詞の混同、「指示許容的」は他表現との混同による誤用がそれぞれ顕著に見られた。それらの誤用の主な原因として、日本語の動詞の自他用法の未習得、日本語の文法規則の過剰一般化、母語の影響などが考えられる。次に、習熟度による誤用傾向の分析を通し、「他動的」の誤用率は学習年数の経過につれ、やや減少する傾向が見られるが、「心理誘発的」「指示許容的」を上回って70%前後を維持していることから、「他動的」は中国語話者にとって習得が最も難しいことが判明した。

最後に、主に誤用数の多い誤用パターンに注目し、第2章の対照研究で得られた結論と照らし合わせ、次の用法別の習得仮説を立てた。

仮説 A：「他動的」使役文において、使役者の制御性が低く、述語動詞が日本語も中国語も自他両用動詞である場合、母語干渉が生じやすいため、他動詞文が用いられ、「させる」の不使用が起こることが多い。

仮説 B：「心理誘発的」使役文において、被使役者は1人称（或いは「人」）である場合、母語転移が生じやすく、自動詞文が用いられず、「させる」の過剰使用が起こることがある。

仮説 C：「指示許容的」使役文において、待遇恩恵的な意味合いを伴う場合、母語転移が生じやすく、「てもらう」構文を使うべきところで、「させる」との混同

が起こることがある。

第4章の検証調査では、アンケートの調査結果を考察し、前章で立てた習得仮説の妥当性を検証した。調査は中国人大学生 99 名を対象に、調査紙による翻訳テストを中心とし、補足的にフォローアップ・インタビューを行った。考察の結果、中国語話者に見られる用法別の誤用傾向は次の通りで、いずれにおいても習得仮説を支持する結果が得られた。「他動的」用法について、仮説 A の誤答率は 70%以上を占めていることから、自他両用動詞が用いられた「他動的」使役文は、中国語話者にとって習得が相当難しいことが分かった。「心理誘発的」について、トータル誤答率も仮説 B の誤答率も、「他動的」、「指示許容的」と比較して相対的に高くないものの、「感動」する以外の動詞において、最多の誤答形式は仮説 B の予測通り（「させる」の過剰使用）であることが分かった。「指示許容的」用法について、トータル誤答率は 60%以上あることから、待遇恩恵的な制限なしの「指示許容的」用法に対応する日本語の習得は、中国語話者にとって習得が難しいことが分かった。そして、仮説 C の誤答率は、問題間の差が大きく、とりわけ使役者と被使役者が同等関係にある場合、仮説 C の予測通りに「てもらう」との混同が起こりやすいことが分かった。

それから、中国語話者の日本語レベルによる誤用傾向は次の通りである。「他動的」用法について、日本語の習得が進んでも、「実現する、集中する、完成する」のような自他両用動詞が用いられた場合、その習得が相当難しく、仮説 A の予測通りに「させる」の不使用が起こる。ただし、「移動する」のような中国語では自動詞寄りの自他両用動詞が用いられる場合は、ある程度習得できるようになる。「心理誘発的」用法について、日本語の習得が進めば、1人称の心理を表す表現の習得がほぼできるようになるが、日本語の授業や教科書で取り扱われる機会の少ない「絶望する」のような心理動詞が用いられる場合、N1 合格者でも母語干渉を受けやすく、仮説 B の予測通りに「させる」の過剰使用が起こることが多い。「指示許容的」用法について、日本語の習得が進んでも、待遇恩恵的な制限なしの「指示許容的」に対応する日本語の習得が困難を伴うことがあり、とりわけ使役者と被使役者が同等関係にある場合、N1 合格者も仮説 C の予測通りに「てもらう」との混同を起こしやすい。

第5章では、被験者が使用している日本語教科書『総合日语』を対象とし、「させる」の扱い方を分析した。それから本研究の習得仮説に基づき、使役文の扱い方の問題点の指摘及び教材改善の一提案を試みた。分析の結果、次のようなことを判明した。『総合日语』では、「させる」に対して意味分類を行っておらず、単なる一つの使役態として取り扱っている。本研究の分類に従って分析すると、文法項目として取り上げられているのは「指示許容的」と「心理誘発的」で、「他動的」と「再帰的」は解説なしに読解文や練習文に出現している。「事故で息子を死なせた」のような「責任的」用法は全く出現していない。

本研究の習得仮説と関連する 3つの用法について、次のような教材における扱いの間

題点を指摘した。「他動的」用法は、文法項目として取り上げられておらず、自他両用動詞が用いられる「させる」構文の導入方法と動詞選択が不適切である。「心理誘発的」用法は、その解説が特に「指示・許容的」と区別されず、人称制限における“让”構文とのずれが言及されていない。「指示・許容的」用法は、使役者と被使役者が「上対下」の関係である使役文が殆どで、待遇恩恵的制限における“让”構文とのずれが、解説されていない。したがって、教材改善を目指し、主に次の提案と解説を進言した。

提案 1: 「させる」構文の 5 つの用法を取り上げ、各々の意味・用法と構文的特徴に関する解説、例文の提示及び文法項目練習を設ける。

提案 2: 「他動的」使役文の述語は「実現する、完成する、増加する、減少する、集中する、移動する」などのような自他両用動詞で、使役者の制御性が高い場合は他動詞文か使役文、低い場合は使役文を用いる。判断しにくい場合は使役文を使ったほうが自然だと言える。

提案 3: 1 人称（或いは「人」）の感情や思考などの心理活動を表す場合は、通常「心理誘発的」使役文より自動詞文を使ったほうが自然である。

提案 4: 「下対上」関係の場合、または恩恵を表す場合、一般的に「指示・許容的」使役文ではなく、「てもらふ／いただく」を用いる。

以上、本研究は「対照研究・誤用観察・検証調査・教材分析」という 4 つのステップを踏んで、中国語話者による「させる」構文における習得時の問題点、習得過程及び誤用の要因について全面的に検討した。本研究で用いた 4 つのステップは、各々の成果を見出しつつ、相互に習得傾向に関する結論を支持しあい、中国語話者の習得傾向をさらに明らかにした。本研究の研究結果は中国語話者に対する日本語教育現場にとって、大いに役立つことが期待できよう。

## 学位論文審査結果の要旨

### 1 この論文の学術的意義

本論文は次のように6章からなっている。

第1章 序論

第2章 「させる」構文と“让”構文との対照研究

第3章 「させる」構文の誤用観察

第4章 「させる」構文の検証調査

第5章 「させる」構文の教材分析

第6章 結論と今後の課題

本論文の学術的意義は、何にもまして「対照研究・誤用観察・検証調査」という三位一体習得研究モデルを用いて、日本語の使役文習得の背後に存在する学習者の母語転移のメカニズムを全面的に突き止めたことにある。「誤用観察」及び「検証調査」という2つのステップにおいて、具体的な研究方法の精密化に貢献していること、また、明らかにされた学習者の母語転移のメカニズムに照らし合わせて、現行のメジャーな教科書における使役文を扱う箇所や、使役文教授の基礎をなす動詞に関する扱い方を丹念に検討し、説得的な改善案を提示したことについても高い評価に値する。

### 2 この論文の諸側面に関する具体的な評価

この論文は、テーマの選定、研究の方法、先行研究の取り扱い、論述の展開、研究の結果のそれぞれの項目について、次のように評価できる。

テーマの選定：

語種としての和語語彙と漢語語彙の違いは体言にも見られるが、構文的に異なる振舞い方をするのは主に動詞である。そのために、動詞のさまざまカテゴリーの規則は語種の相違によって大きく異なるので、習得をより困難にしている。論文提出者は、教育現場で何が求められているかを的確にとらえ、その解決が待たれる難題の一つである使役の習得を博士論文のテーマに選んでいる。選定の仕方は適切であり、意欲的である。

研究の方法：

この論文は、第二言語習得分野における「対照研究・誤用観察・検証調査」という三位一体習得研究モデルを用いて、書き上げられたものである。対照研究、誤用観察、検証調査という3つのステップを丁寧に踏んで研究が進められ、特に「誤用観察」及び「検証調査」の段階では、分析方法がより緻密なものに磨き上げられている。

先行研究の取り扱い：

対照研究、誤用観察、検証調査という3つのステップに関する先行研究は、互いに異質なものであるために、収集した3種類のものを、3つのステップを取り扱う第2章、第3章、第4章においてそれぞれ検討・分析し、受け継ぐべき部分と改善すべき部分に分けて、理路整然と構成されている。

論述の展開：

対照研究を扱う第2章では、まず対照研究としての先行研究の後に公刊した日中両言語自体の研究の成果を生かして、新たに分類の原理を導入して対照研究を行い、両言語の使役における対応非対応のあり方を明らかにした。続いて、誤用観察を扱う第3章では、前章で突き止められた両言語の使役における非対応の部分に着眼し、それに沿った誤用が起きているかどうかを、中間言語コーパスを用いて丁寧に観察した。そして、誤用が大量に起きているケースを踏まえて、母語転移と考えられる3種類の仮説を提示した。仮説検証にあたる第4章においては、中国国内の二大学の学生を対象に2種類の調査を行い、前章で立てられた3つの仮説を検証し、そのいずれも妥当なものであることを証明した。論述の展開は論理的で、飛躍は見られない。

研究の結果：

研究の結果については、中国語話者が日本語の使役を習得する場合における次の3種類からなる仮説を提出し論証を加えた。

仮説A：「他動的」使役文において、述語動詞が日本語も中国語も自他両用である場合は、他動詞文が用いられがちで、「させる」の不使用が起こる。

仮説B：「心理誘発的」使役文において、被使役者が1人称（或いは「人」）である場合、「させる」の過剰使用が起こる。

仮説C：「指示許容的」使役文において、待遇恩恵的な意味合いを伴う場合、「てもらおう」構文を使うべきところを、「させる」を使ってしまう。

最後に一言付け加えると、現行の教材における使役の取り扱い方を改善する提言も基本的に妥当なものである。

### 3 審査委員会の結論

この論文は、第二言語習得分野における「対照研究・誤用観察・検証調査」という三位一体習得研究モデルにのっとり、適切な研究手順、及び、豊富なネイティブの言語使用、学習者の中間言語に対する観察を通して、説得力の高い結論を導いている。

本審査委員会は、全員一致で、この論文が以下の人間社会システム科学研究科の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると判断する。

- 1) 研究テーマが絞られている。
- 2) 研究の方法論が明確である。
- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。